

## ゲオルク・トラークルの生涯について

日名 淳裕（成城大学准教授）

### ◆生誕と家族、戯曲家としての挫折、詩人として生きる決意

ゲオルク・トラークルは1887年2月3日にハプスブルク帝国領ザルツブルク（現在のオーストリア共和国ザルツブルク市）で、ハンガリーに入植したシュヴァーベン人の血を引く父トビアス（宗派はプロテスタント）とチェコにルーツをもつ母マリアの間に六人兄弟姉妹の四男として生まれた。ザルツブルク旧市街に残る生家（現在のゲオルク・トラークル研究所兼記念館）が示すように、鉄鋼業で財を成した父トビアスの庇護のもと比較的裕福な幼年期を過ごす。1892年にはゲオルクの人生に大きな意味をもつ末の妹グレーテが誕生する。



ゲオルク・トラークル (Georg Trakl 1887-1914)  
出典「インスブルック大学図書館所蔵」

ギムナジウムに入学した頃に、作曲家アウグスト・ブルネッティ＝ピサーノからピアノの講習を受け、ショパン、リスト、ワーグナーらを愛聴し、芸術への関心を高めていった。また1904年頃からドイツ、オーストリアの同時代文学（レーナウ、ゲオルゲ、ホーフマンスタール）、フランス象徴主義文学（ボードレール、ヴェルレーヌ）、ニーチェの哲学、ドストエフスキーの長編小説に強い影響を受けて創作活動始める。生涯を通して影を落とすこととなる薬物嗜癖および妹グレーテとの近親愛もこの頃に始まったとされる。二度の落第を経てギムナジウムを中退したのち、当時ドロップアウトした名家の子息に残された唯一の道であった薬剤師を目指して地元の薬局で見習いとなる。その一方で同郷の作家グスタフ・シュトライヒャーの援助のもと、イプセン、ストリンドベリ、メーテルリンクを手本とした戯曲家として文壇に登場、1906年にザルツブルク市劇場で自作「死者の日」を上演したのを皮切りに、地元新聞紙上で劇評、散文を立て続けに発表するなど幸先のよいスタートを切ることができた。しかし、次作「蜃気楼」の上演は大失敗に終わり、深く絶望したゲオルクは戯曲の原稿をことごとく破棄した。この劇作における挫折が後の創作活動の中心に詩作を据える契機となったことは重要である。

### ◆ウィーンへの出発、ランボー詩集との出会い、父の死と精神の危機

1908年9月、薬局での見習いを終えたのち、大学で薬学を専攻するためにウィーンに向かった。一年後には、兄を追いかけるように妹グレーテもウィーンに来ている（音楽アカデミーで学ぶ）。この時期に書かれた詩はゲオルク自らによって纏められて出版の機会を探ったが未完に終わる（いわゆる『選集1909』、1939年に遺稿の一部として刊行）。それでも、文芸評論家ヘルマン・バルの助力でウィーンの日刊紙に自作の詩を掲載するなど詩人としてのキャリアを積み、徐々に固有の詩風を作り上げていった。ゲオルクが最も大きな影響を受けた詩人の一人とされるアルチュール・ランボーの詩集（K.L.アマー訳、序文はシュテファン・ツヴァイクが書いた）と出会ったのもこの頃のことである。

1910年6月に父トビアスが死去すると、裕福だった家庭の経済状況がにわか傾き始め、それに呼

応するかのようにゲオルクの精神状態もいっそう不安定なものとなっていった。妹グレーテはベルリンに転居したが、学業を終えたゲオルクはウィーンに残り、ハプスブルク帝国軍衛生分隊所属の薬剤師となった。1911年にインスブルックに再配属されるが、依然として経済状況は悪く、薬物とアルコールに依存する抑鬱的生活が続く。そのなかでもザルツブルクの文学サークル「パーン」と交流するなど、独自の表現を求めて詩風の改良を重ねた。これ以後ウィーン、ザルツブルク、インスブルックの三都市間を転々とする不安定な生活が続くこととなる。

#### ◆フィッカーとの出会い、第一詩集の出版、戦場での突然の死

1912年4月に、作家ローベルト・ミュラーを介して、インスブルックの文学サークルを率いるルートヴィヒ・フォン・フィッカーと知り合う。以後、ゲオルクは自作のほとんどを彼が主宰する雑誌『ブレンナー』に発表した。フィッカーは年長の友として、詩の良き理解者として、また経済的な援助者として、ゲオルクの創作活動を全面的に支援した。またその広い交友関係を通じて、ゲオルクは批評家カール・クラウス、建築家アドルフ・ロース、画家オスカー・ココシュカ、詩人エルゼ・ラスカー＝シューラーといった同時代を代表する様々な分野の芸術家と交流した。同じ頃、ランボーと並んで大きな影響を受けたとされるフリードリヒ・ヘルダーリンの作品に親しみ、翌年の第一詩集出版へと繋がる詩人として最も創造的な時期を経験するが、同時に広場恐怖症、離人症などの病が亢進し、それから逃れるために薬物への依存がさらに深まる。1913年1月、フィッカーの尽力で得たウィーンの労働省の職をわずか二時間の勤務ののちに放棄し、インスブルックに戻る。1913年7月にライプツィヒのクルト・ヴォルフ出版からゲオルク自身が待ち望んだ第一詩集『詩集』を刊行した。

1914年になると第二詩集『夢の中のゼバスティアン』（1915年死後刊行）の編集に着手する。3月にはベルリンに赴き、前年に結婚した妹グレーテを病床に見舞う（流産の後に体調を崩していた）。新興国アルバニアやオランダ領インドネシアで職を得る計画を立てるがいずれも挫折し、哲学者ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインから匿名の寄付を受ける。同年7月ハプスブルク帝国がセルビアに宣戦布告して第一次世界大戦が勃発すると、ゲオルクは薬剤士官補として東部戦線に出征した。部隊が東ガリツィア地方（現在のウクライナ西部）に進軍した際、激戦地グローデク（同名のトラークルの詩で有名）の戦闘で錯乱状態となり自殺を試みたが拘束される。軍務を解かれて、精神鑑定のためにクラカウの野戦病院に移送された際、見舞いにきたフィッカーに戦場で書いた最後の詩を託し、11月3日夜に自ら命を絶った（コカインの過剰摂取）。なお、兄の死からおよそ三年後の1917年11月に妹グレーテも自ら命を絶っている。二人の間に交わされた書簡は今日残っていない。

ゲオルク・トラークルの詩の特徴である、詩の視覚的要素（色彩表現）や聴覚的要素（音韻的技術）が意味を凌駕する様子、詩の中の語りの出発点が複層的であること、造語、引用、イメージを並列的にちりばめるモンタージュ手法、後期作品に顕著な伝統的詩形式のラディカルな破壊は、とくに第二次世界大戦後のドイツ語抒情詩に大きな影響を与えたとされる。

日名淳裕 Atsuhiko Hina

成城大学法学部准教授。専攻はドイツ語抒情詩、戦後オーストリア文学。業績に『モルブス・アウストリアクス オーストリア文学をめぐる16章』（共著、法政大学出版局、2023年）、「ゲオルク・トラークル「最後の詩」における祖国の死と故郷の再生」（論文、日本独文学会研究叢書141、2020年）ほか。